

Ⅱ 昭和二十年代

焼け跡から始まって

第二次世界大戦後の日本経済は、戦争によって極端に疲弊し、その上、焦土と化した国土の中で、荒廃した産業の再建と物の極端な欠乏からの脱却に向かってスタートを切った。

当時の日本経済はGHQの主導する経済民主化政策により、財閥の解体、農地の改革、労働の民主化が強力に推し進められ、市場主義経済、アメリカ的経済合理主義等が導入されて、その後の日本経済の発展に大いに貢献することとなる。

同時に日本の産業界は、官民一体となって、石炭

と鉄鋼に生産を集中させて、産業の基盤づくりを行い、重化学工業主体の産業構造を発展させて行った。

しかし、絶対的な物不足は続き、さらに過剰投資によるインフレーションが起こった。また強引と言われたドッジラインは深刻な不況を作った。

ところが、昭和二十五年に起きた朝鮮戦争によるアメリカ軍からの特需景気が発生し、わが国の産業を蘇生させ、鉄鋼・繊維・食料の増産が続き、さらに素材型産業が経済の牽引力となった。

昭和二十八年末に東京・青山にわが国で初のセルフサービスによる、スーパーマーケットの「紀の国屋」が誕生した。

太平洋戦争から市川市立第二中学校の誕生まで

昭和20年（終戦のショックと急速な民主化）

第二次世界大戦終結

8月15日に終結、連合国が日本に進駐、最高司令官マッカーサー自由主義の助長奨励

GHO (General Headquarters) 連合国軍最高司令部の政策

◎政治・民事・宗教自由制限の撤廃を指令（政治犯釈放・思想警察全廃・治安維持法撤廃など）

◎婦人開放・労働組合結成奨励・学校教育民主化・秘密審問司法制度撤廃・経済民主化の五大改革を要求

◎財閥解体に関する覚書を発表

◎国家と神道の分離を指令

II 昭和二十年代

昭和十六（一九四一）年、一期生が国民学校（現・小学校）一年に入学した年、日中戦争に続いて日本は太平洋戦争に突入した。

二中誕生の地、市川は「歴史のふるさと」とも言われ、緑濃く桜並木も美しい環境に恵まれ、関東大震災以降、東京の近郊住宅地として発展していた。一方で明治以来の伝統的な軍の町で、国府台には野戦重砲第一・第七連隊、旅団司令部、陸軍病院、東・西練兵場などがあり、富国強兵の時代を敏感に反映するところだった。

戦況が悪化した昭和十九年末には米軍機による空襲が度重なるようになった。東京へ米軍機が飛来する度に空襲警報のサイレンが鳴り、市川の夜空は探照灯の光の帯が何本も交差し、高射砲の爆烈音が響き、その破片が降ってきた。須和田が丘にも高射砲陣地があった。一夜にして十万人の生命と百万人を超す都民の家が焼失した昭和二十年三月十日の東京大空襲の時は、朱に染まった夜空と焼夷弾がズシン・ズシンと落とされる音に市川市民は防空壕で震えていた。市川の戦禍は幸い軽微だったが、東京から被災者がどっと流入してきた。

当時の学校生活は、祝日には全校登校して講堂で「教育勅語」の奉読を受け、軍事教練、避難訓練など戦時色は刻々と強まっていたが、小学生には自然環境に恵まれたなかで勉学にも遊びにも事欠かない日々があった。住民は東京へ通勤するサラリーマン家庭が多く、学歴も高く、東京志向が色濃くあった。戦前から、小学校六年生は東京の私立や都立の中学校・女学校を目指して受験勉強が盛んに行われていた。県立や市内の私立、実業学校などもあったが殊に男子中学校の受け皿は小さく、小学校卒業後多くのものは高等小学校（二カ年）へ進んでいた。

スポーツの復活
戦争で途絶えていたスポーツが復活、11月16日に大相撲秋場所、11月23日にプロ野球東西対抗戦開催

戦争末期になると中学生以上は軍事関係へ動員され、都立第七高等女学校（現小松川高校）では校舎の中に軍需工場が作られていたという。真間小学校でも運動場の西半分がさつまいも畑となり、防空壕がそここに作られていた。男性の教員は兵役に、学童も三分の一近くは疎開してしまい、最後には休校となり、軍隊が駐屯して校舎は一時、兵舎になったと校史に記されている。

昭和二十（一九四五）年八月十五日、終戦を期して、社会は一変した。

空襲の恐怖は去り、自由と解放の喜びが溢れたが、今度は食糧難による空腹との戦いとなった。戦禍は多方面に及び、衣食住のすべてが不足して、激しいインフレとなった。戦災を免れた市川は住まいを求める人々が急激に増加してきた。学校の教室はすし詰めとなった。

昭和二十二年三月三十一日、新憲法の精神に則した教育基本法・学校教育法が公布され、翌四月一日施行され、「六・三制」による男女共学の「新制中学」がスタートした。しかし、敗戦直後の混乱期の制度改革に教育現場は迅速な対応ができず、「市川市立第二中学校」が真間小学校の東側校舎を借用して船出したのは、二十二年五月十日である。

市川の中、二中、三中、四中、五中の「新制中学」五校はいずれも仮校舎で同時開校した。この時、須和田が丘にあった旧防空本部兵舎は、三中と五中の仮校舎に当てられた。須和田が丘に「市川市立第二中学校」の新校舎四教室が落成し、二年生だけが移転したのは翌昭和二十三年九月である。

昭和二十二年五月創立の市川市立の新制中学・五校の設立場所（仮校舎）

市川市政が施行された昭和九（一九三四）年以降、市川市には小学校が五校あり、新制中学は大略それぞれの学区に一校が設置され、いずれも仮校舎で発足した。

昭和21年（国も赤字、企業も赤字、家計も赤字の経済再建暗黒時代）

日本国憲法公布
主権在民、象徴天皇制、戦争放棄を規定、11月3日公布

戦後初の衆議院議員選挙
4月、婦人議員39名誕生、共産党が議会に初進出

☆「ヤミ市」の全盛期

☆全国中等野球大会復活、プロ野球リーグ戦再開、第1回国民体育大会開催

☆「当用漢字表」（一、八五〇字）と「現代かなづかい」告知

☆「日米会話手帳」戦後初のミリオン・セラ

昭和22年（混乱からやや立ち直りの時代：新教育制度誕生の年）

教育の六・三制の開始

新しい法律の制定相次ぐ
証券民主化に関する法律、財産法、労働基準法、独占禁止法、地方自治法、健康保険法施行令改正（初診療無料など）、国家公務員法、改正刑法（人権保護を重視、不敬罪・姦通罪の廃止）、職業安定法、児童福祉法、警察法（地方分権化・民主化のための国家地方警察・自治体警察の設置）、過度経済力集中排除法、臨時石炭鉱業管理法（3年間の炭坑の国家管理）、改正民法（家）制度廃止、食糧管理法一部改正等

社会党内閣の誕生

6月片山哲内閣（社会党首班の連立）が誕生。4月第1回参議院議員選挙

中学校名	設立場所	生徒の主たる出身学区
一中	市川小学校	市川小学校区
二中	真間小学校	真間小学校区・国分小学校区の一部
三中	須和田旧防空本部兵舎（二中の現在地）	八幡小学校区・国分小学校区の一部
四中	市立高等女学校（宮田小の現在地）	中山小学校区
五中	須和田旧防空本部兵舎（二中の現在地）	旧制の国民学校高等科（二カ年）を新制中学と同じ三年制にするため作られた変則的な中学。国分小学校区の一部が一学年に入学。昭和二十四年三月廃校。

「五中」について 「五中」の前身市川中央国民学校は昭和十八年四月、市川市内の国民学校五校の高等科（二カ年）を分離併合して現・平田小学校敷地に設立された。

同年十一月火災により校舎の三分の二を焼失したため、各国民学校に分散、間借り。戦況の悪化に伴い生徒は軍需産業に動員、あるいは少年兵となる。終戦後の二十年十一月頃、須和田の旧防空本部兵舎跡に移る。二十二年四月、学制改革により中央国民学校（二カ

年）は新制度の市立第五中学校に昇格、三年制となる。二十一年度入学の生徒が卒業した二十四年三月で廃校となる。

二十二年五月以降入学した生徒、職員の一部は「二中」に合併統合された。

一方、現在の五中は二十二年五月、大柏小に設置された「大柏中」が二十四年十一月、大柏村の市川市合併に伴い、「市川五中」と改称され、二十五年大野町に移転、現在に至る。

平成九（一九九七）年現在、市川市立の中学校は十六校。同年五月、創立五十年を迎えた市立中学校は「一中」「二中」「三中」「四中」「五中」の五校である。

真間小学校校舎での出発

市川市立第二中学校「学校沿革史」は第一ページに次のように記録している。

「本校は昭和二十二年三月三十一日法律第二十六号の定める所により、昭和二十二年五月十日市川市立第二中学校として開校。

学区は真間小学校区と同一。校舎は真間小学校の一隅四教室と職員室を借用し、机、腰掛、校具に至るまで借用して発足。学級数六、職員数八、生徒数二八六。初代校長高山徳治氏」

創設の重責を担った高山校長はPTA会誌『玉藻』一号に次のように書いている。

校風の樹立

高山 徳治

新憲法の施行を機として、昭和二十二年五月日本教育史上空前の教育制度の根本改革が行われ、六三三四制のうち六三三制だけが実施せられ、こゝに六年の小学校と三年の中学校が誕生し、義務教育九カ年の制度が出来上がったのである。

然し吾々に課せられた耐乏生活はこゝに火蓋を切り、有るものは生徒だけで机一脚、腰掛一つ有るわけなくましてや校舎などと思ひもよらぬのが世間並である。

だが市川市の各中学校殊に二中は真間小学校の厚意によって、青空教室や、窓のない校舎での教育をやる必要はなく、借家ながらも堂々たる教室を持つことが出来たのである。（中略）木を例に取れば、広々とした所に苗は植えられたのである。

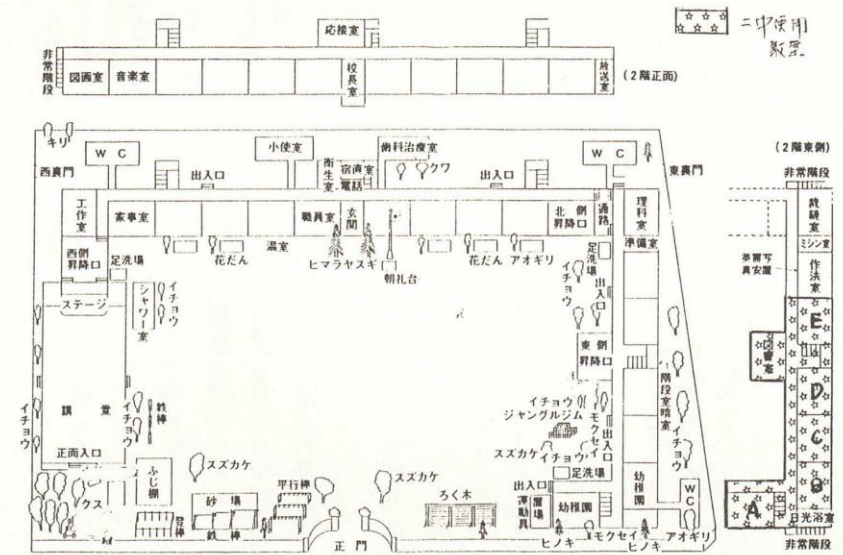
これを立派に生長せしめ、有用の材たらしめるまでに生育せしめるのは、山主たる吾々教育者の責務である。故に吾々は如何なる努力も払わねばならぬ。（後略）

（『玉藻』一号 昭和22年12月）

高山校長は就任前、県庁の秘書課に勤務。知事から突然「市川二中の校長をやってくれんか」と請われたという。創立三十年の回顧談（PTA会報）57号 昭和52年7月）には次のように話されている。

「私が二中の校長に就任するについて、やらなければならない事が、沢山ありました。それは、進

二中使用した真間小の教室



昭和24年当時の先生方

スポーツ
古橋広之進が水泳四百メートル自由型に4分38秒の世界新記録樹立。泳ぐたびに記録を更新、「フジヤマのトビウオ」と言われた

☆登呂遺跡の発掘再開

☆第一回共同募金

発足当時の有様を、朝日新聞「天声人語」は次のように書いている。

裸の新制中学

ほたるの光に送られて小学校から中学校に上がった時は、年少少女が希望に胸ふくらまして一番楽しい年である。その大切な時期を無残に打ちくだしているのが、新制中学の現状である。学校には机も腰掛けも黒板もない。生徒は男も女も、板の間にあぐらをかい

て、ボール紙などを机がわりにしての座学である。たいていは小学校の居候教室で、その結果小学校は二部授業、三部授業になっている。備品も小学校の借り物が多く、そのため小学児童が前かがみの座学を余儀なくされ、扁平胸がふえているところもある。新制中学の不備が小学校教育を圧迫する結果を招いているのだ。教科書も無いので、先生が文部省に出向いて写本を

駐軍の通達の翻訳が曖昧だったために、初め六三制採用を重視していませんでした。ですから準備もできていません。それで制度採用となっても四月に開校出来ません。何しろ校舎も無いんですから。そこで真間小学校の教室を借りて開校しました。」
「入学式は五月十日でした。(二中・入学式十時、真間小・入学式八時)」という貼紙が方々にしてありました。教室は、川沿いの校舎を二中が使うように机や椅子も運んでありましたし、音楽室も二中優先で使わせて貰いました。それはみんな真間小の校長のご配慮によるものでした。おかげで二中は同時に発足した市内五つの中学校中、最も早く軌道に乗ることが出来ました。当時は、日本全体が物資欠乏の時で白墨の調達にも苦労しましたが、とにかく生徒数二八六名、六学級で始まりました。」

し、それを生徒に写させるところもあるという。本も教室もそんな風だから、自習と遠足と見学をくり返すことにもなる。校舎が不足で二カ村に分かれているため、先生が自転車や二輪車をかけまわる例もある。先生も不足だが、また他面いい先生が中学に吸収されてしまい、小学校の方が先生の素質が落ちたという困った問題も起きている。

これは小中学両教育を損なうことになる。机だけでも何十万円もかかる時だけに、校舎を整えることも大変である。起債も困難な今、地方富クジの発行によっても、一日も早く裸の教育に着物をきせねばなるまい。

(「朝日新聞」昭和22年6月4日)

昭和23年（経済再建への道開ける）

東西冷戦始まる
4月に西ベルリンの輸送規制、封鎖始まる。

経済復興の道
8月、エロア資金（占領地域経済復興資金）対日物資供給開始、GHQ対日自立復興の九原則（経済安定九原則）の実施を指令

GHQの民主化政策の転換
「教育委員会法」「国家公務員法改正」「マッカーサー書簡に基づき公務員の団交・争議権否認
企業体労働関係法」等が施行

☆「サマータム」実施、電力節約など効果がみられず廃止

高山徳治校長、能勢一雄教頭以下、開校の二十二年度に着任した在原千寿子・草深清・飯盛宏の三先生（真間小から転任）と、橋本司郎、小沢まつ先生の五人で五学級を担任した。緒方志津・吉岡英吉・金子シサ・桜井慶治先生は少し遅れて着任した。翌二十三年度も真間小から永野作楽・桜田笑子の両先生を迎えている。

当初の教員不足は深刻で急場を支えたのは大学生の代用教員で東大生あり芸大生あり多士済済であった。校内は若い先生方の熱気とりべラるな空気が溢れていた。

昭和二十四年四月、二中はやっと中学校としての形が整った。

三期生の入学で生徒は一年生から三年生まで揃い、また、旧五中との合併もあり、生徒数は八百名を超えた。先生方の陣容も整った。真間小での間借り生活も終り一応全員須和田が丘に結集した。ところが、この年の十月、教育委員会から千葉県教員の配置転換の発表があり、本校でも一挙に七名の転任となり、大打撃を受けた。

この一番の原因はこの年の生徒数が予想より少なかったことである。これは二十四年の市川市の学区変更で二中は市川小の平田、新田地区と真間小と国分小の一部と決まった。ところが四月の入学式当日に市川小出身者が一人も来なかったのである。その他に教員定員が当初の学級数の一・七倍から急に一・三倍に引き下げられたこと、他校で教員が不足していたことなどであつたらしい。

この時、竹内、河合、田村、栗林、石井、石塚、佐藤の諸先生方が惜しまれつつ二中を去られた。なお、翌二十五年にも一部学区の生徒が来ないとの情報事前に伝わり、PTAでは市当局に熱心に働きかけやと解決し、市川小、真間小、国分小の生徒が喜んで二中に通学するようになった。

〔校内新聞〕5号 昭和24年12月、7号 昭和25年5月）



校章の由来

二中が真間小学校舎で出発した年、中学生を印象づける白線を一本あしらった黒い学帽に「楓に二中」の帽章がつけられていた。須和田が丘と地続きであった真間山は江戸時代紅葉の名所として知られ、多くの文人墨客が来遊し「真間の紅葉狩り」を書画に残している。初代高山校長は、真間にゆかりの紅葉に思いをよせ、当時真間山弘法寺にあった二葉楓という名木の一葉を帽章にとり入れたという。デザインは現日展理事の桜井慶治氏（創立当時の美術講師）。「楓に二中」は昭和二十六年十一月、正式に市川二中の校章として制定され、校旗や徽章に使われている。なお、校章が制定されるまで、「楓に二中」の男子帽章に対して女子は青地に白の「桜に二中」の丸い七宝バッジを胸に付けていた。

校歌

校歌は昭和二十五年一月二十二日に完成、真間小講堂で完成発表会があった。同年三月の第一回卒業式で全校生徒が斉唱した。作者は、

作詞 浜田佐賀衛、作曲 平井保喜の両氏である。

浜田氏は歌人にして俳人。子息が当時二中で教鞭をとっていた縁で校歌の作詞をされ、作曲を浜田氏と同郷の縁で作曲家平井氏に依頼した。平井氏は後の平井康三郎である。

昭和三十八年に音楽担当の村上正治先生が着任された。その頃校歌は記録としてメロディーだけ残っていたが、実際に歌われていなかった。村上先生は、これを四部合唱曲に編曲し、校内合唱コンクールを催して全校生が愛唱するよう奨励された。



校歌の楽譜

父母と先生の会（PTA）の発足

昭和24年（経済安定へのきざし：インフレの芽を摘んだドッジ・ライン）

ドッジライン（インフレ抑制政策）
均衡予算・単一為替レート設定。1ドル＝380円

シャープ勧告案

「税制改革勧告案」発表、所得税主体の直接税中心主義で、地方財政平衡交付金制度の導入

湯川秀樹ノーベル賞受賞
湯川秀樹、中間子論でノーベル物理学賞受賞

☆日雇い労働者の賃金二百四十円。通称ニコヨン

☆プロ野球が分裂し、セントラル・リーグとパシフィック・リーグとなる

II 昭和二十年代

昭和25年（朝鮮戦争と価格統制の撤廃）

朝鮮戦争勃発

6月に朝鮮戦争が始まる、7月に国連安保理は国連軍の派遣を決定、マッカーサーを国連軍最高司令官に任命。国連軍は9月に仁川に上陸し反撃を開始、10月20日に平壤を占領。中国人民義勇軍が朝鮮戦争に出動、北朝鮮軍と12月に平壤を奪回。日本は朝鮮戦争の結果、いわゆる特需で好景気へ

価格統制の撤廃

乳製品、シャンプー、魚、野菜、コメ以外の主食、みそ、しょうゆ等の価格統制と配給制度が撤廃され、ようやく食糧事情が好転した

☆警察予備隊の創設

☆NHKテレビの実験放送開始

☆山本富士子第一回ミス日本、美人コンテスト話題に

☆ロレンスの「チャタレイ夫人の恋人」発表

国も新制中学校の設置義務を負わされた市も大変な財政難の中にあった。しかし、国や市に任せて手をこまねいていては、わが子、わが二中の前途に光明を見出だすことは出来ない。開校二カ月あまり後の七月二十日、文部省とCIE（民間情報教育局）の指導による初の父母と先生の会結成準備会が開かれ、九月六日の総会で市川二中の「父母と先生の会」（PTA: Parent Teacher Association）が発足した。初代会長は真間小学校の後援会会長を永年務められた保々誠次郎氏が選任された。

昭和二十二年七月二十日「父母と先生の会」（PTA）初の結成準備会開催

七月二十七日 第二回準備委員会

九月六日 PTA総会により発足

PTA会長 保々誠次郎選任、「父母と先生の会細則」承認

PTA会長挨拶（概略）

保々 誠次郎

今回、日本の姿が大変革し、自由の立場から機会均等による民主主義の教育を受けるようになったのは隔世の感があります。

学校の後援会も学校や先生の為が先ず第一であったものが、生徒の為が第一となり、先生と父兄が何事をおいても先ず生徒のためと変ったのは誠に結構で嬉しいことです。

真間小学校の後援会長を四、五年間も務め、過去の遺物感のある私が新発足する二中のPTA会長に推さ

れるのは如何と申すのです。しかし今度の制度は会長や校長や権力者等が独善的に運営する訳には行かないのです。PTAの会員が共に生徒に対して慈愛を持って、学校の事は会長や校長にまかせて置けば良いというような考えを持たず、全精神を傾けて名譽も努力も惜しまず自他の生徒を指導されんことを希う次第です。この度の敗戦は我々の罪なりと深く思い、その罪滅ぼしに生活の時間を割いてお努めする事が義務なりと考え、敢えてPTA会長を引き受けた次第であります。

【玉藻】一号 昭和22年12月

無からの出発を余儀なくされた二中のPTA活動の状況は、最初に制定された父母と先生の会細則や、その翌年に改定された市川市立第二中学校PTA会則にのっとり財政部、体育部などの実行部門を設定、教職員と共に学校経営の実際にあたった。初期の『玉藻』『二中学校内新聞』『二中新聞』は『PTAだより』にかなりのスペースをさいて、その活動の内容を克明に伝えている。

PTA会費

昭和二十二年（発足時） 一口 月額 貳拾円

二十三年

月額 八拾円以上

当時のほげしいインフレは昭和二十一年の小売物価が一年で六倍になり、二十二年、二十三年も前年比で三倍近い上昇をみた。ちなみに昭和二十二年七月の標準賃金は月額一、八〇〇円であった。

「義務教育はこれ無償とする」という大原則とは裏腹にPTAの財政的な援助と協力なしには、戦後の新教育は成り立たず、一時は「六・二制」という再改革の声もあがったという。校舎建設に苦慮する市役所側からは昭和二十三年六月に「六・三貯金の協力」を要請されたと校内新聞創刊号にある。

須和田が丘に四教室とはいえ独立校舎が落成した昭和二十三年九月、西谷彦四郎氏が二代目PTA会長に就任した。就任挨拶には学校を一日も早く軌道に乗せようと真正面から取り組まれた情熱が伝わってくる。

会長就任の御挨拶（一部省略）

西谷 彦四郎

新しい日本を背負って立つ者は子供達です。私達は子供を立派に育てなければなりません。どんなに苦し

くともこの時をがしては、日本を背負って立つ日本人は一人も居なくなると思います。まどろっこしい様ですが、人物の養成こそ、戦後の日本を建て直す唯一の道です。

昭和26年（経済は戦前の水準に達したが、景気は調整期に）

対日講和条約
対日講和会議米サンフランシスコで開
催（9月4日～8日、52カ国が参加。
9月9日対日平和条約・日米安全保障
条約調印

☆伊豆大島の三原山が大爆発

☆民間放送局が正式に営業開始（新日
本・中部日本）

☆パチンコが大衆娯楽として定着、18
歳未満は禁止

☆戦後禁止の学校柔道が復活

☆黒沢明監督「羅生門」ベネチア映画
祭でグランプリ受賞



二中は六三制実施により生まれた新しい学校です。従って、本会がなさねばならない点は沢山ありますが、PTAの焦眉の問題は次の三点と存じます。

第一に、校舎新築の促進です。幸い教育に深い御理解ある浮谷市長始め、市当局のお力により、須和田の丘に第一期工事として四教室の竣工を見ましたが、引き続き一日も早く第二期工事に着手する様促進運動をし、子供達を自分の校舎で落着いて勉強出来るようにしなければなりません。

第二に、設備の充実です。校具、備品等必要な設備は出来るだけ、速かに取揃え、子供達の勉学に便ならしめなければなりません。殊に参考図書、理科実験用具、体育用具、ピアノ等は、どうしても備えつけない

教職員の給与費の二分の一と、教材費の一部に国の予算が付いたのは昭和二十八年四月からで、「義務教育費国庫負担法」により財源が確保されるようになった。しかしその頃の経済不況は地方財政の窮乏を招き、しわよせは教育費にも及んだという。

PTAがこの重い課題から解放されたのは昭和三十五年である。この年、地方財政法の一部が改正され、市町村立小・中学校費のうち人件費と建物の維持・修繕費についての住民負担が禁止された。

二中創立時のPTA回顧談

市川二中五十年史作成が立案された頃、初代高山校長、能勢教頭は既に亡く、当時の資料も乏しく、PTAの往時を知る方々の計報も相次いだので、二中創立当初のPTAでご活躍くださった方々に急遽お集まり頂いた。

出席者 PTA 川崎信一・岡崎盛枝・宮崎良子・近藤君江

生徒 山田 齊・細谷広澄・玉川香苗・天野睦子

日時 平成二年四月一日 場所 岡崎宅

岡崎 急がないと皆、明日をも知れぬ八十路の身、お役に立つなら喜んで臆けながら覚えておくことをお話ししたい。西谷（二代目会長）さんも二、三日前に亡くなったとのことだ。

宮崎 真間小に間借りしている間、真間小の後援会長をしていた保々さんが二中の会長を兼務していた。：私どもは役員になってほんとにお金がない、物が無いのに驚きました。

岡崎 はっきり記憶しているのは、市の方から二中の校舎に良い場所があったら探してくださいと言われて、国府台の兵隊屋敷の方々へ赤ん坊を背負って、竹本さん、飯盛先生などと一緒に見に行ったこと。今の国府台高校か和洋女子大の辺りに粗末な兵舎の残骸があった。今の須和田が丘の所が静かで良いということ。西谷さんと決めました。高山校長は毎日のように市役所へ行き、島津学務部長と交渉していました。

宮崎 私は二年目からで、学校はようやく出来たばかり、ほんとに何もない。家庭科のミシンもアイロンもない。買う金をつくるため、上野のアメコで仕入れたら、船は息子の友人を介して錦糸町の製造元から原価で卸して貰いました。入れ物もなく主人の勤め

と考えます。

第三には優秀な先生を揃える事です。立派な子供を養成するには、優秀な先生を揃えなければなりません。これには、先生の待遇改善も充分に考慮しなければなりません。

これ等の重要問題は、敗戦後の財政難の為、政府にも市にも充分な予算がない為皆様の物心両面の御協力が必要で

悪性インフレ下であって、生活難に苦しんでいる私達ですが、此の苦しみを耐え忍んで、先生とお父さんお母さんが、しっかりと手を組んで、日本再建の為に子供達を立派に教育しようではありませんか。

（校内新聞「号外 昭和23年10月16日」）

先で名入りの箱を貰い、モンペを履いて錦糸町から背負って帰り、10ケ十円の船を7ケ十円で売り、わずかの利益を教材購入にまわした。

また松戸の方で佃煮の安いのが有ると聞けばリヤカーに一斗樽を乗せて仕入れに行き、教室の黒板に販売日を書いて生徒からお母さんに伝えて貰い、船などと一緒にかりさばいた。物が無い時代で、有りさえすればよく売れて、いくらでも儲かった。

お金が出来て買おうにもアイロンなどは品不足で買えない。市からの補助がないので、品物で寄付して頂きたいと、そんなお願いまでして一軒一軒図々しく伺ったのです。

ピアノは西谷会長の知合いから半額位で譲って頂いたらしい。

川崎 PTAは戦争に負けて新しい学校制度ができて始まった。PTAとはなんぞや、Tの言いなりではなく建設的なPでなければいけないとして活動した。教員免許を持つ先生は戦争で亡くなったたり大変不足していたが高山校長は向学心がある優れた学生を先生にした方が良く、非常に先見性があった。私は先生の思想が偏向していないか心配だった。



PTAは日曜日でも夜もなくやっていた。会合は夕方六時ごろ始まった。

岡崎 当時のPTAは二中を一番良い学校にしようとして、受け入れ態勢を整え優秀な先生に来てもらうよう努力して、熱のある先生に恵まれました。

宮崎 体育祭の時も運動よりお金儲けが先で、汁粉部・菓子部・果物部・紅茶部など食券まで作り、小豆をどこから安く買うとか、 TENTを張るのは一般のお母さんに割当てして手伝ってもらった。本名さんと私がお菓子の責任者で、三年間続けました。

近藤 体育祭のころは朝の五時頃から夜の八時位までPTAの仕事をしました。

川崎 二十三年から環境のよい須和田が丘に移ったが道が泥んこでモッコを担いで道つくりもやった。崖のような所だった。

宮崎 赤土で雨が降ると谷のように流れて、長靴は手に入らないので高下駄にモンベ姿で給を背負って。よくやったと思います。

川崎 須和田校舎に移った年、親は息子や娘たちの進学を希望したが、教材がなくて基礎的な教育を受け

るにも、黒板に掛ける地図も何もない。校舎もプレハブなので板が割れてしまう。教育設備を良くしようとする人かで組んで二中の区域内では子供のいない家にまで寄付のお願いに行った。主だった家から高額な所では五千元、二千元、一千元と合計十五、十六万円集めた記憶がある。本名さんは事務に堪能で当時をよく覚えていたがこの間他界された。

宮崎 私たちは小口の寄付を個別に集めて回り、体育祭の食券を差し上げました。五百円位が多くて、食券は十円でした。

岡崎 会長が良かった。その上、校長が本当に一生懸命なので我々も頑張った。

川崎 これは大変な美談だと思う、一代で終わらせず皆さんの子供にも引き継いでもらいたいと思います。

△余談△ 創立時期一緒に苦労されたPTAの方々には高山校長を中心に「さつき会」を結成して折々旧交を温め、女性のPTA役員グループ、竹本・内田・堅川・江下・石橋・岡崎・近藤・宮崎による「八笑会」も長いお付き合いであったと聞く。

養護学校の草分け「鹿倉学級」

二中が須和田が丘に根を下ろすことになった昭和二十四年春、学業不振児のための「補助学級」が編成された。この学級は翌年全学年を通じて一クラスの「特殊学級」となり、当時職業担任であった鹿倉操先生が自らその任を引き受けられたため「鹿倉学級」の名で親しまれ、昭和三十二年市立養護

学校に引き継がれるまで県下の特殊教育の先駆的役割を果たした。

鹿倉学級の誕生には、真の民主主義教育はどうあるべきかをめぐって二中の教職員がいかに真剣に取り組まれたかを物語る数々のエピソードが秘められている。

戦後の新教育制度には心身障害児に対する特殊教育が定められたにもかかわらず、社会・経済両面の貧窮から手つかずの状態が続き、そうした子の多くは学校から放置されるか長期欠席であった。

大勢の中から優れたもののみを選びだして教育するのではなく、障害のある子供たちにもそれぞれの可能性を認め、世の中に出た場合の生活力をつける教育が必要ではないか——教員室では何日も夜を徹して話し合いが行われたと洩れ聞く。それは受験体制への取組みを期待する親たちの声が高まってきた時期でもあった。

鹿倉学級が正式学級と認められたのは二十九年県指定特殊教育研究校となつてからで、それは学級開設から六年目のことである。それまで、教室の確保、担任教員、定員の確保、父兄の理解を得るなどいくつかの困難なハードルを乗り越えて存続できたのは、高山校長、長谷川校長、高橋校長の三代に引き継がれた教育の理想と、二中教職員の温かい支持がある。

文芸誌『玉藻』には鹿倉学級生徒の素直ではほえない文章と共に、優しいまなざしで障害児との交流を書いた生徒の作品が載せられていた。また鹿倉先生の地道な取組みに接することで、多くの生徒は身近かに特殊教育への関心を深めることになった。

鹿倉学級は年ごとに教室を転々としていたが、二十八年の夏やっと独立教室が新設された。当時の新聞報道によれば「新しく出来た独立教室は総工費十六万円で旧兵舎を改造したもの、建坪二十坪。玄関、教室、調理室、休養室、購買部からなり、毎日男子生徒二名ずつを交代に泊らせ、二学期から鹿倉教員（二）が二十四時間寝食を共にして生活教育に魂を打ち込んでいる姿がみられる。…六時起床、掃除、朝食の用意、全員登校とともに作業の畑仕事やつくえの修理、昼食。…購買部の仕事を通

特殊学級経営記録

市川市立第二中学校

昭和二十九年



鹿倉学級校舎（昭和28年）

ある回想と私の願い

真間小学校から目を転じて、右手に「ふもと湯」の煙突を見上げながら歩を進める。両側の桜と銀杏の枝葉がおおいかぶさる程に茂った校門坂を登りつめると、思い出のいっばい詰まった市川二中の校庭が一気に広がりをみせる。

その市川二中と通学路を挟んで道路ぎわいっばいに立ち上る三階建ての校舎が、「市川市立養護学校」です。昭和三十三年四月に開校し、全国で三番目に開設された養護学校で、市川二中内に二十四年四月に開設された特殊学級（鹿倉学級）を前身としています。特殊学級や養護学校は、さまざまな原因で精神面や身体的に障害を有する子供たちのために、その障害の種類と程度に応じた適切な教育の内容と方法で、その場を提供し子供たちが障害を克服しながら、より社会的自立の生活が目指せるように援助しようとする教育です。

市川二中では敗戦後の新しい教育の理念の実践に、初代校長高山徳治先生や教頭の能勢一雄先生らがリーダーシップを発揮されて、前向きに学校経営に取り組みました。私はその学校経営の重負項目のひとつとなった特殊学級の学級担任を希望し手を挙げました。その事が契機となって教師生活四十年間のすべてを、障害児教育の分野に身を置き退職後も「市川手をつなぐ親の会」や、社会福祉法人「ささなか会（船橋市）」に關係して、障害児者の教育・福祉の仕事にお役に立てばとやり甲斐を覚えながら続けています。又、支援して

くださった同窓生や多くの方々に感謝しているこの頃です。

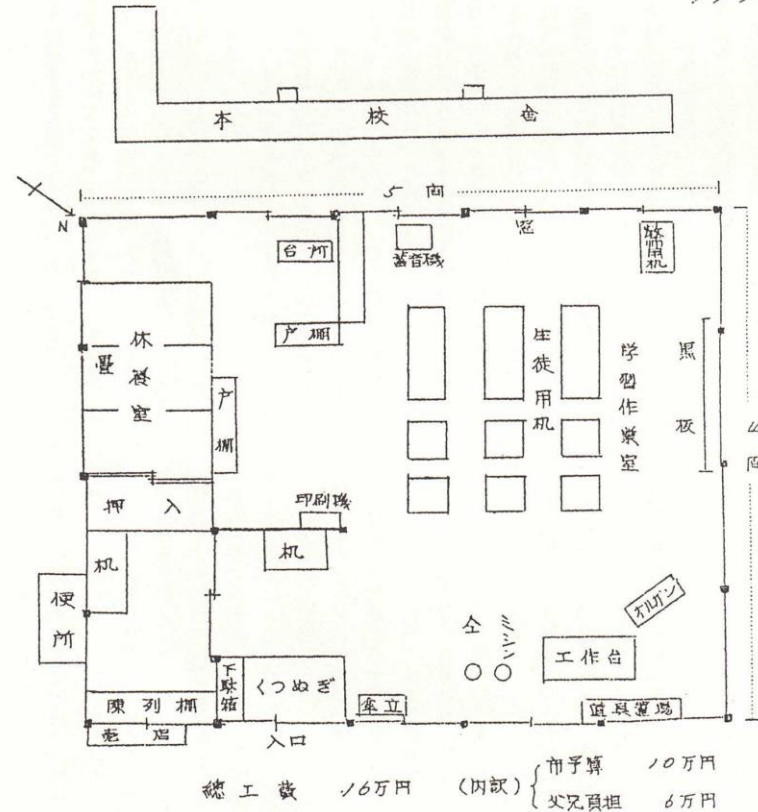
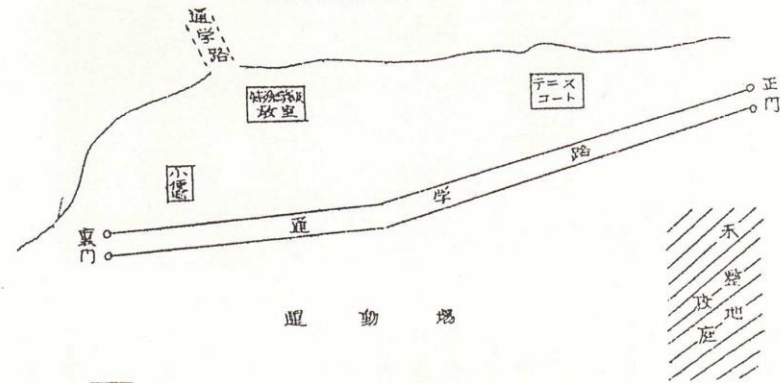
皆さんの記憶にも残っている事と思いますが、特殊学級（鹿倉学級）の「靴みがきのM君」。彼の働き場所は市川にとどまらず京成線に沿って船橋、松戸、さらに葛飾から江戸川へとひろがり、ビッカピカの靴みがきの仕事とともに、街の人気者として多くの人々に愛されました。同窓生の皆さんからも何かと声をかけていただき、家庭にまで入り込んで仕事をさせてもらっていました。残念なことに五十八年九月、仕事の移動の途上トラックによる不慮の交通事故に見舞われ、四十八才の生涯を閉じました。M君は三十年間の充実した靴みがき人生で輝き通しました。合掌。

強度の言語障害を伴っていましたが、底ぬけの明るさで人なつこかったK君。よく自転車でお使い当番に走りまわってくれました。彼は四十三年間精励で通した製綿工場を、この秋定年退職を迎えることになっています。

もう一人紹介しましょう。日曜日は学校が休みであることを理解するのが困難で休日になると母親に「ガッ・コウ、ガッ・コウ」とくりかえしせがんだN子さん。大ぜいのお友だちと共に医療ケア付きの社会福祉施設で日々充実した暮らしの中で、静かに老いを迎えています。

市川二中と市立養護は、今はそれぞれ独立した公立

校舎校庭見取図



じて経済生活を体験させたり、ニワトリの飼育も…。現在男六、女七名。これまで合計十名が卒業し、機械工、店員などに就職したり、上級学校に進学している。…県教育界から高く評価され視察者が後を絶たない…」（「朝日新聞」昭和28年9月28日）と記されている。

第二回 校庭平面図（建坪二〇坪）

昭和27年（特需の思恵から消費の年に向かう）

血のメーデー事件

皇居前広場でデモ隊と警官隊が衝突、2人射殺、血のメーデー事件と新聞を賑わす。7月、破壊活動防止法・公安調査庁設置法・公安審査委員会設置法施行

☆米、エニウエトク環礁で水爆実験

☆羽田空港が返還され、東京国際空港として発足

☆ヘルシンキオリンピックに、日本16年ぶりに参加。石井庄八レスリングで金メダル

☆白井義男がボクシングフライ級世界チャンピオン

☆世界卓球選手権大会、初参加の日本7種目中、4種目優勝

II 昭和二十年代

昭和28年（隣が買ったからうちも買う時代）

朝鮮戦争終結
わが国に特需をもたらした朝鮮戦争は、7月に終結した

テレビの出現

2月にNHKがテレビ放送開始。受像機は国産17インチ15万円、視聴者は一〇〇〇人。8月に日本テレビの民間放送の開始。12月にNHK「紅白歌合戦」が日劇から公開放送開始

☆ミスユニバースコンテストで伊東絹子が3位入選

☆ボストン・マラソンで山田敬蔵、世界新記録で優勝

学校ですが、その生い立ちは兄弟関係であり本家と分家の例にたとえられる程の切っても切れない関係であると考えます。市立養護で学ぶ障害をもつ子供たちは、生涯一般社会の正しい理解と暖かい支援を必要とします。

日本は敗戦のどん底から戦力を放棄し、平和と文化国家の建設を標榜して経済大国といわれるまでの復興の道を歩んでまいりました。しかし、バブル崩壊をは

男女共学

市川市の新制中学は、男女共学で発足した。旧制度では基本的には小学校も男女は組が別になっていたから、一期生にとっては中学校で初めて体験する男女共学は、むしろかしい年頃でもあり違和感が先に立つものだった。その証拠に、一年のホームルームの時間に何度も席替えをし、極端なときは教室の真ん中をあけて男女が両側に別れて席を作ったこともある。

男女共学に寄す

永野作楽

六・三制実施によって一番大きな目に付く変化といえは、それは男女共学である。教育内容の変化は別として、学習上としては、この男女共学は我々教師としては一番大きな変化である。元来男女の本質的平等は民主主義社会の根本であるが、現在の日本においてはまだそれが実現されていない。（略）教育の機会を男女にひとしく与え、女子の水準を向上することは男女平等を実現する道である。そして男女共学は男女の教育の機会均等を実現するための一つの途であり男女の正

常な成育をはかる適当な方法である。（略）最大の根本的目的を追及して考えて見る時、その理想達成にはまだまだ容易でないといながら差別的観念の薄らいでいる事実と目に見えぬ相互の理解とは、本心に喜ぶべき事と思うのである。父兄の人々の中にはまだこの点に疑問をもたれる方がないわけでもないが、今後は更に着眼を高くもたれて真の男女共学の意義目的に協力せられて新しい社会の民主化に寄与せられることを願うのである。

〔校内新聞〕1号 論説 昭和23年9月10日

所感

一B 橋本和明

僕たちは小学校の一年から、男は男、女は女でまとまった教育を受けてきたが、中学校になって急に男女共学になった。それについて僕がこの一年をかへりみて色々気のついた事を簡単に述べて見る。

欠点として一に上げられるのは、クラスのとまりがよくつかない。男は男で、女は女でそれぞれ独特の気持をもっている。だから男があることをしようと思つて女に言うのと、女はそんなことはいやだとか出来ないとかいう。（略）

第二として男がちよつといたずらをする、女はす

ぐに先生に告げ口をする。男も女が同じようなことをするとやはり先生にいう。少しくらいのことはお互いに我慢し、お互いに話し合つて解決したいと思う。しかし欠点ばかりでなく良くなったこともある。女はいつもきれいに掃除をするため、クラスがとても清潔で勉強するのも気持ちよくできる。また勉強も男は女にまけまいとしてするし女も男にまけまいとするため男女とも勉強するようになった。

（略）もっと大きな気持ちで男と女と協力してクラスをよくし、勉強しやすいようにしなければならないと思う。

〔校内新聞〕1号 昭和23年9月10日

事ごとに対立し、お互いあまり話しもしなかった男女であったが、一期生も卒業間近になるとわかまよりも薄れて仲が良くなっていた。二期生は体育祭のフォークダンスで男女で手を繋ぐのをとてもいやがっていたが、卒業式の日の謝恩会のあとではフォークダンスを楽しんだという。三期生になると小学校四、五年生を共学で過ごしてきているのでそれほどではなかったようだ。

二中学生徒会と市内生徒会

二中では昭和二十四年四月に生徒会の規約が制定された。初代会長は桑村益夫君であった。さらに市内小中学校生徒会が集まって市内生徒会を構成していた。市内生徒会で浦安町水害見舞を行うことが決議された。



本校生は街頭募金をすべく九月七日、八日の両日四時から六時まで三方面に分かれて実施した。(略) 一、一四七円八八銭の募金と、校内生徒からの二、七二九円六一銭との合計一三、八七七円四九銭が(二中学生徒会から)出され、市内生徒会には五万円余りを十三日に無事浦安町役場に届けた。(略)

(「二中新聞」4号 昭和24年9月22日)

生徒会役員諸君は、極めて意欲的に活動した。昭和二十四年九月、台風で江戸川が氾濫し、行徳、浦安方面が大洪水に見舞われたことがある。そのとき、生徒会が自発的に立案し、市川駅前募金を実施した。その金額は、六千八百円位(二日目の分)であった。現在の貨幣に換算すれば、三十万円以上になるのではなからうか。夕方まで募金をしたので銀行に預金できなくて、生徒会の顧問をしていた私が預かり、宿直室の押入れの隅に保管することにした。今は亡き、小高尚夫、中村宗司先生らと、その夜十二時頃まで話し合っていた。「もし今夜泥棒が来たら、どうする。」と小高先生が言ったので、「お金はここにありますが。」と案内してやるという冗談を言っていた。

募金活動で疲れてしまい、ぐっすり眠っていた。その同じ紙面に、校友会費は毎月三十円払っているのに部員が独占してコートや運動具が使えない不満が載っている。

昭和二十五年四月に生徒会の会則を作った。これにより生徒会長を立候補者から全校生徒の投票で

の時である。「金を出せ！」ドスのきいた声である。月の光りでは外は明るい。当時、宿直室に蚊帳をつってあった。蚊帳の中から見ると、ぼんやりと人影が見える。夢ではない。腰が抜けてしまうとは、あの時のようなことであろう。眼鏡を探し、かけようとしたときである。蚊帳の中に入ってきたのである。首をおさえて、四〇五回頭をなぐってしまった。「俺だ、俺だ。」と叫んでいたが、もうおそかった。小高先生であった。

(旧教職員 寺島利雄 談)

生徒会の規約が制定されたのは四月はじめてであるがそれ以来生徒会は順調な発展をして、学校生活の改善のため活発な活動を見せている。その意見もはじめの頃の禁止条例風のものから建設的な意見を述べるようになったのは好ましい次第である。去る十一月二十五日の生徒会では、図書室の経営問題に触れ図書貸し出しを取り上げたり、週番機構に三年ばかりでなく二年生も入れたほうが上級生下級生の融合の上から良くはないかと、校友会問題で選手の練習はもろん必要だが、反面、全部の人が喜んで練習できるような機構もほしいといったような意見も出ている。

(「二中新聞」5号 昭和24年12月9日)

選出することになった。これは、当時としては画期的なことで新聞記事にもなった。三年の各クラスが学級委員を推して立てた立会演説会では応援演説をした。一学期の第一回選挙で当選したのは田中昂生君であった。新聞部は三学期の選挙に先がけて号外を発行している。この時の会長当選は吉田和雄君であった。翌二十六年四月の生徒会長選挙に立候補して当選した陶山安三君は、校友会活動を活発にするために、校友会費の値上げをするとのスローガンをかけていた。当選した後で公約通りに値上げをしたか否かの記録はない。

『玉藻』と文芸部

文芸部の活動で忘れてならないものは『玉藻』の発行であろう。『玉藻』一号の発行は昭和二十二年十二月であった。『玉藻』は最初PTAの会報としての役割があったが、職員、生徒の文芸作品が大部分を占めていた。今読んでみても内容の充実した立派な冊子であるから、当時の新制中学の発行するものとしては秀逸なものであったのではなからうか。発行に当たっては文芸部の力だけでなく先生方の熱意と協力が大きかったことは間違いないであろう。

『玉藻』の誌名は万葉集の山辺赤人の次の歌からつけられている。

かつしかの真間の入り江にうちなびく玉藻刈りけむ手古奈し思ほゆ

『玉藻』は残念なことに現在バックナンバーが揃っていない。一号から八号までのうち六号、七号が欠けており、九号以降も発行されたのか否かも分かっていない。(これらを所持している方はご一報下さい)

そのほか文芸部では吟行会や歌会、句会をしばしば行なった。その折の作品の一部は二中新聞に毎号発表されていた。千葉先生、緒方先生、竹内先生など大変熱心な指導をされていた。



貴重な一年間

三年になってからの転校生だったから、山の上にあった二中には一年間しか行っていない。クラブ活動として文芸部に入ったように思うし、冊子の編集をしたようにも思うし創作の原稿を書いたようにも思う。……ように、とはっきりしないのは、私が二中での一年を嫌悪しているせいかもしれない。学生生活は楽しかったし良き友にも恵まれたのだけれど、何よりも大きく嫌らしく、「高校受験」が行く手に立ち足はだかっていた。大好きな本を読みたくても勉強しなければ」という気持ちで邪魔をしたし、映画も我慢しなければならなかった。小心で真面目一途だった女の子の私は、反抗を知らなかったのだ。

が、何か書きたいという気持ちはおさえられたから

よけいに強くなって、受験勉強にうんざりした夜更け、私は自分だけの物語り世界を作って遊んだ。作家になりたいと考えたのも中学最後の一年で、誰にも言えない望みだった。当時は、作家などとてもなくヤクザな仕事で陽の当たらない道だったのだ。「読んではいけない。書いてはいけない」と思うせいで望みはふくらみ、気持ちはたかまって行った。今になって考えると、押さえられ、止められたことは貴重だったと思う。テストと勉強に明け暮れた一年で、私は自分を抑圧することの大切さを知った。あれから五十年もが過ぎたのが夢のようで、夜更けにひとり物語を構築している私は年齢こそ重ねたが思いは昔とまるで変わっていない。

(三期 青柳久美子 現 立原えりか)

新聞部

校内新聞の発刊「市川二中校内新聞」は市内新制中学のトップをきっての創刊であった。昭和二十三年九月十日付の第一号はガリ版刷りのA4判四ページである。学芸部委員が教師陣の強力な指導によって発行したとあるが、ほとんど先生の手に依ったのであろうか、十月十四日付の第二号に、「もうすぐ、すべてが生徒の新聞委員の手で運営されることになるでしょう」とある。紙不足で高価な用紙の調達にも苦労があったのを反映して、無料配布でなく一部いくらで販売した。創刊号に「投稿作品掲載の際は新聞無料配布」と書かれた原稿募集の広告がある。因みに第二号は続いて出た体育祭特集の号外と併せて八円であった。その頃四中も新聞は有料であったという。

市川新制中学校の先端を切って校内新聞を持つことになりました。先に校友会誌『玉藻』をもつ私達、更に新聞を発刊する事は或いは重複の感がないでもありませんが、月刊紙としての新聞は、また自ずから別な意味を含んでいると思います。校内新聞の意図するところは、学校と家庭との連絡、生徒の全科目にわたる作品発表及び編集の練習など、その他新聞を通して、

幾分たりとも生徒の教養或いは家庭の学校に対する関心の昂揚に役立つことが出来れば幸いです。(略) 学校新聞としての性格上、主義主張を狭く限定することなく、いかなるものでも、それが愛校の精神より出し、建設的教育的なものである限り、広く紙面を提供したいと思えます。(以下略)

(校内新聞「2号 昭和23年10月14日」)

昭和二十四年九月二十一日付第四号から「市川二中新聞」と紙名を変更した。二月の第三号から久しぶりの発行であった。第五号は十二月九日付である。

市川市立第二中学校校内新聞 第1号

市川二中校内新聞

発行所 市川市立第二中学校
編集者 市川市立第二中学校
印刷所 市川市立第二中学校
市川市立第二中学校

創刊の辞

高山徳治

時既に九月二十一日付第四号から「市川二中新聞」と紙名を変更した。二月の第三号から久しぶりの発行であった。第五号は十二月九日付である。

父兄より

新制中学といつて直に感ずる事は予算の不足か、設備の整頓とあり、其の他諸君の御協力をお願いいたします。

森川 嘉市

二中校内新聞創刊号

昭和二十五年に各クラスから選ばれた新聞委員による新聞部が出来た。部室を旧兵舎の一角にもらい、放課後はよくそこに集まっていた。顧問の千葉先生から新聞のつくりかたを教わり、編集や記事、広告集めなどは生徒が勝手にやっていた。ところが折角出来上がった五月九日付第七号が職員会議で発行禁止の処分を受けた。問題になった記事は三つあったがいずれも三四ページにあったので、真ん中から裁断して一二ページのみで発行にこぎつけた。二年生がアンケートをもとに書いた「先生横顔集」が観察の鋭い記事であったのが発禁の本当の理由であったと今でも思っている。

(二期 高木恒久談)

この事件以後、新聞部は先生の監修を受けることになったようだ。